

幸せは足元に

SS 幸子はあもにい

三十年ほど前の我が家の食卓風景を思い出しました。

長男が小学四年のとき、学校で「尊敬する人は誰ですか」という質問に、「僕は、『おばあちゃんです』と言ったんだよ」。そんな息子の得意気な顔に、おばあちゃん（夫の母）は、「そうかい。嬉しいね」とちつちやな身体を丸めてにっこりしていました。父親は感激の涙目でくしゃくしゃ顔に。幼稚園児の次男坊は「ソンケイってなあに？」と会話に加わり、賑やかなひとときでした。

次男が四、五歳の頃、「これ、おじいちゃん（仏様）にかざってあげて」とぶくぶくした手にしっかりと握られた草花と、もう片方の手は、おばあちゃんをつないだ手。そんな光景が今もしっかり目に浮かんできます。

長男は慎重派、次男はやんちゃで、人懐っこく、おしゃべりでスポーツ大好き、人一倍

優しく友だち思いの強い子で、将来の人間関係には安心したものでした。

長男が高校受験、次男が中一になる目前、実家の母が亡くなり、長男が卒業、次男が高校一年の時、同居していた義母が亡くなり、同時期引越騒動でバタバタしていました。その次男の高校生活は、バイト中心で友人関係も広がり、バブル期だったバイトの給料は、殆ど遊行費に消えていったようです。長男は高校卒業後、しばらく自宅に引きこもる状態でした。夫は技術系のサラリーマン、結婚後も出張や日曜出勤も多く、仕事中心人間でした。私は、PTAの活動等に力を入れ、他者に役立つ生き方が最良なのだと思っていました。趣味のスポーツクラブの練習、試合に夢中で合間にアルバイトをやり家庭を顧みる余裕もゆとりもありませんでした。「我が家には、男が二人いる」と夫に言われたくらいでした。そのときの私は、何かに取り付かれたかのように突っ走っていました。誰かに頼まれたらもちろん断ることは殆どなく、頼まれる前に気遣いするのが女性として当たり前で、いいことだと思っていました。自分を大切にしていたか疑問です。「ノー」が言えない主体性のない私で、他者の役に立つことで自分の評価を得ようとしていたのかもしれない。

今から十四年前の一九九五年、阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件などが起きて日本中大激震が走ったその年、私は五十歳の誕生日を終えてクリスマススイヴを前にした我が家も、次男が薬物事犯で逮捕され家宅捜索が入るという大激震がありました。

息子が逮捕されたなど、とても受け入れがたい出来事にショックでした。事件を犯した息子に対する嫌悪感と世間体を気にする親のエゴ、夫には、あなたが仕事ばかりで子どものことを注意してくれないからと八つ当たりをして、自分がどんどん嫌な性格になっていきました。家族がばらばらになっていくような感じがして、どうしていいかわからない焦りで混乱していました。自分の子育ては、間違っていたのだろうか。のびのび育てたつもりが…あれもこれも自責の念に駆られ、仕事もスポーツクラブもバイトも全て止めてしまおうと思いました。しかし、誰にも本当のことが言えず、どれも抜けられずにいました。ビクビクしながらの対人関係は、暗く孤立しがちになっていきました。

それでも、単身赴任中の夫は、私を観光案内に誘って気分転換を図って気遣ってくれましたが、息子のことが気になってなかなか楽しめずに帰宅する私でした。

執行猶予中の息子に、これまでの放任的な関わりを反省し、彼の行動に強く関心を持

ち、本人がやるべきこと（自室の掃除、洗濯など）まで幼い子供の世話をするようにやってしまい、四六時中うるさく注意・監督して、私の考えが正しいとばかりに親の枠にはめようとするのが、親の愛情（実は執着）だと勘違いしていました。それが彼を更生させる手段だと思い込んでいました。本人は彼なりにやり直そうと努力していました。しかし、彼のやり方を見守れる私たちではありませんでした。

数年後再逮捕された時、私たちは自分たちのかかわり方に限界を感じていました。その時、運よく薬物問題に詳しい民間の家族相談機関（セルフ・サポート研究所臨床心理士・加藤先生）につながることができました。

そこで、息子の薬物問題を何とかしてほしいと願ったところ「それは彼の問題でしょ」と指摘され、彼の問題を彼に反していくことが自立させることだと認識させられました。

薬物問題で何度も逮捕される息子は、意志が弱いと思っておりましたが、意志の強弱でコントロールできない体質的な「薬物依存症という病気」なのだといわれましたが、なかなか体から受け止められるようになるには時間がかかりました。良かれと思ってやってきた説教や監督・過干渉、借金など息子の抱えた問題の尻拭いに追われ、息子に振り回され

ている家族も病気に感染していたのでした。それらは逆に薬物依存という病気を進行させていたのです。「親の育て方が悪い」と後ろ指差されないようにという、実は親の間と親の保身が根底にあったことを認めざるを得ませんでした。しかし、「その方法しか知らなかったのですから、これまで大変でしたね」と相談先のカウンセラーに慰められたことは、当初、自責の念でいっぱいだった私はとても救われました。

あの我が家の大激震が起きた九五年から六年後に相談機関につながった数年間は、私が主に依存症の息子と直接的な関わりをしていました。単身赴任中で週末帰宅する夫に、息子の問題に直面していない不満を言ったり、自分の大変さを訴えたりしていた私でした。夫も、「仕事しながらも心配はしている」と言い返し、夫婦の会話はざらざらした関係になっていました。

ある時、息子との同居が難しくなった私は、相談機関が用意していたシェルター（家族の安全を守る避難場所、また内省する場所）に入りました。その間、自宅のガラス戸を割って立てこもった息子を説得するために戻った夫は、この時初めて依存症の息子と真正面から対峙したのだと思います。二人で本気でぶつかり合って、夜を共にし、翌日も話し合

った結果、赴任先のアパートに息子は行くことを決心したようでした。そんな時でも、仏様にお茶とお線香をあげていたことを知り、夫の強さと優しさを感じたのは、この時でした。

その後、父子二人が寢食を共にした生活で、少しずつ信頼関係を取り戻していったようです。夫は、仕事をしながらも彼に、体力の回復と日常生活の良さを味わわせようと、密に付き合っていたくれました。

私はなかなか恐怖心がとれず、四十日間シエルターに入っていました。その間夫は時々所要で東京に戻ることがあり、「こんなところで、ひとりさびしかったらうな」と息子に割られたガラス戸で雨戸が閉まったままの自宅のソファに腰掛け、私の気持ちを察してくれたのでした。また、私も、父子二人が離れたところで生活をしている場面を想像しながら、「ああ、大丈夫だろうか」と離れていて何もできない夫の心情に、心から気づくことができたのでした。

その後にも、息子の逮捕という残念な結果もありましたが、依存症という病気の理解が深まるほど、息子が薬物を使っているようがいまいが私たち家族にとって、大切な愛すべき

わが子なのだという実感を持ち、身近な家族が何に困って、どんなことを喜んでいいのかなど、ほんとに小さなことに目を向けることにしています。

三十年前「尊敬する人はおばあちゃんです」と言っていた長男は、介護やりハビリ関係の仕事を選んでいきます。長男家族と食事を一緒にした時、丸テーブルを囲んだ食事中に「ママもパパもおじいちゃんもおばあちゃんも手をつないでみてえ」：「あ〜〜みんなつながっている〜うれしいね」という四歳児の笑顔にみんなの笑顔。時間を超えて孫と息子たちが重なり、まさにすべてつながっている感覚がした瞬間でした。

五十歳に起きた事件から十四年今誕生日を迎え、孫から「おばあちゃんだいすき。たんじょうびおめでとう。〇〇より」と自筆のメッセージ付きプレゼントをいただいたばかりです。

人生の後半この問題が縁で出会った人たちに、支えられ共に苦しみ喜び、優しさ、勇氣、信頼など力をもらい真の心の友となっています。そして、自分や相手を大切にするために「ノー」が言えるようになり、私自身が成熟していくことが他の人への助けになることを知りました。

私たち夫婦も、少々耳が遠くなり、聞き違いも多くなり夫婦漫才をやっているようで笑いが絶えません。夫婦が助け合える関係になつて喜んでいきます。これらは薬物依存症の彼が身を挺して届けてくれたメッセージのプレゼントだったと感謝しています。お返しは、この体験を生かし、私ができることに挑戦していくことだと思っています。